

近代英国のガーデニングとモラル

—— ジョン・クローディアス・ラウドンとジェーン・ラウドン夫妻の思想と実践からの考察 ——

Gardening and moral in the modern Britain: John Claudius Loudon and Jane Loudon's philosophy and practice

橘 セ ツ

キーワード： 1. 英国、2. ガーデニング、3. モラル、4. ジョン・クローディアス・ラウドン（1783–1843）、5. ジェーン・ラウドン（1807–1858）

Key word: 1. Britain, 2. Gardening, 3. Moral, 4. John Claudius Loudon (1783-1843), 5. Jane Loudon (1807-1858)

要 約

ジョン・クローディアス・ラウドン（1783–1843）は、外国から英国に新しく移入されたエキゾチックな植物について新しい植樹スタイルや造園方法の提案を行った。さらに、ラウドンは富裕層から庶民まであらゆる人々を対象に、住居の快適さとまわりの自然環境を生かした新しいライフスタイルを提案し、デザインし、実際のプランとして示した。人生の後半では、ラウドンは、ジェーン（1807–1858）という伴侶を得る。才能ある小説家でもあったジェーンは、ジョン・ラウドンのもとで、園芸作家としての才能を開花させる。本稿ではラウドン夫妻の実践を紹介し、どのような哲学とモラルがあらわれたのかを考察する。ラウドン夫妻はどのような園芸の実践によって人間は幸福になれるかという問題を探求した。ラウドン夫妻にとって園芸デザインにかかわる仕事は都市やいなかに住する人びとの幸福な生き方をいかに追求できるかということと結びついていた。かれらの庭園や都市のデザインはモラルの実践の場所であった。

I. はじめに

19世紀に活躍した造園家ジョン・クローディアス・ラウドンによると、本来英国に自生した樹木と灌木は約200種に対して、17世紀には海外から約1000種、18世紀には9000種の植物が英国に紹介され栽培された（Loudon, 1854）。17世紀後半から18世紀前半は、地中海沿岸の南ヨーロッパやトルコなどの温暖な国々から園芸先進国のオランダを経て新しい珍しい植物が多く英国にもたらされた。さらに南北アメリカ大陸、そしてアフリカ大陸やアジアから多くの外国産のエキゾチックな植物が英国に移入された。これは、ヨーロッパの人びとにとって未知の植物を求めるプラント・コレクターと種苗業者の精力的な活動のおかげである。英国に集められた

エキゾチックな熱帯性の植物は、冬には暖房施設で温度管理された温室などの室内で大切に栽培された (Coats, 1969 ; 白幡, 1994 ; Tachibana, 2000 ; 2004 ; 2010)。

ラウドンによれば、17世紀には外国から英国に移入されたエキゾチックな植物の新種に最大の興味を持って栽培したのは、園芸・植物学に関心のある医学・薬学関係者、牧師などのキリスト教会関係者、貿易商人たちであって、その地域で最も裕福な階層ではなかった。それに対して18世紀になると、このような外国からの新種、珍種、異種交配の植物の収集に熱をあげたのはその地域で最も裕福な地主たちとなった (Loudon, 1854 : 54)。さらに19世紀になると、ラウドンは「外国産か自国で改良された様々な木や灌木を全く植えていないようなモダン・スタイルの邸宅は、趣味よくレイアウトされているなどと絶対に主張できない」とまで言っていると英国の歴史学者キース・トーマスは紹介している (トーマス, 1989 : 318)。英国は、ヨーロッパの中では北に位置し、もともとの植生は、貧弱であったが、19世紀には、世界中から紹介された豊かな外来植物にかこまれていた。

最新流行の園芸を追求する財力のない貧しい人びとや都市の労働者も、熱心に草花を育てた。トーマスによると園芸の趣味によって人びとは品性やモラルを高めることができるという考えが社会にひろく行き渡っていた。

園芸には、貧しい労働者を教化する力があると信じられ、人をわが家につなぎとめ、几帳面さと優雅さのたしなみをひろげてゆくと考えられていた。……手入れのよい田舎屋の庭は、眺めも美しかったが、社会的満足を再確認する象徴でもあった。……花卉展を催せば、農民のモラルの向上につながるだろう (トーマス, 1989 : 354-355)。

トーマスがのべるように園芸の思想と実践はモラルと結びついていた。

一方、ラウドンの活躍した英国では、18世紀後半以降進行した産業革命を経て、世界ではじめて工業化をとげた都市では環境の悪化がみられるようになった。首都ロンドンには地方出身の工場労働者やドックで働く港湾労働者があふれた。19世紀のロンドンでは、住民が暖房のために使用する石炭の燃焼からでる煤煙やスモッグなどの大気汚染、テムズ川の水質汚染、都市に住む工場労働者や港湾労働者の人口過密やかたちの貧困による劣悪な住環境が社会問題視された (メイヒュー, 2009 ; 1992)。

これに対して労働者の健康的な生活を確保することは国力の充実にもつながるとオクタヴィア・ヒルなどの社会改革家たちは労働者たちが休憩し、健康を促進し、新鮮な空気を吸い、レクリエーションのために活用する緑のあるオープンスペースを確保するため運動した (中島, 2005 : 57-64)。都市の大気汚染などの都市問題はロンドンの都市化とともに進行したが、その対策として都市の中に植物を植樹することにより緑のスペースをつくることは有効であると議論された。

ラウドンは、外国から新しく移入されたエキゾチックな植物について新しい植樹スタイルや造園方法の提案を行った。さらに、ラウドンは富裕層から庶民まであらゆる人々を対象に、住居の快適さとまわりの自然環境を生かした新しいライフスタイルを提案し、デザインし、実際のプランとして示した。本稿ではラウドンの実践を紹介し、どのような哲学とモラルがあらわれたのかを考察する。人生の後半では、ジョン・クローディアス・ラウドンは、ジェーンという伴侶を得る。才能ある小説家でもあったジェーンは、ジョン・ラウドンのもとで、園芸作家としての才能を開花させる。

Ⅱ章では生涯をかけて有用性と美の両立の探求を行ったラウドンの思想と実践について、1) ラウドンの園芸家としてのキャリアのはじまり、2) 園芸デザインを通してのモラルの実践：i) 温室をめぐる、ii) ラウドンの多岐にわたる活動：園芸雑誌の発刊、樹林園から庭園墓地のデザインまで、3) ピクチャレスクを超えて：庶民の住宅改良について紹介する。Ⅲ章ではジェーン・ラウドンの視点からジェーンがどのようにジョンとパートナーとして生き、ジョンから受け継いだ思想を実践したのか、1) ジョンと出会うまでのジェーンの作家としてのキャリア、2) ポーチェスター・テラスでのジョンとの生活、3) 合理的に生活を楽しむための思想と実践について考察する。

Ⅱ．有用性と美の追求：ジョン・クローディアス・ラウドンの思想と実践

1) ラウドンの園芸家としてのキャリアのはじまり

メラニー・ルイーズ・サイモ Melanie Louise Simo の『ラウドンと風景 *Loudon and the landscape: from country seat to metropolis, 1783-1843*』(1988) によりながら、ラウドンの人生を簡単に紹介しよう。

ジョン・クローディアス・ラウドンは1783年にスコットランドのエディンバラの南西にある村キャンバスラング Cambuslang (ラナークシャー Lanarkshire) で農家の7人兄弟姉妹の長子として生まれた。かれは幼少時から父親の働く農場ケルズ・ホール Kerse Hall を手伝った。同時に、かれ専用の小さな庭園スペースを父からもらい、そこに自分で新しい種を取り寄せては蒔き、栽培方法についての本を読み、植物の成長をスケッチし、庭園のデザインを考え実践するのがかれの幼少時の楽しみであった。学校へ上がったからも、かれは植物学と科学が大好きであった。

11-12歳のときラウドンは近所の植物栽培業者 nurseryman で風景式造園家 landscape gardener であり当時の最新技術であった温室についての専門家のジョン・マワー John Mawer に弟子入りした。かれはマワーのもとで研鑽をつんだが、マワーが1798年に亡くなった後には、エディンバラのリース・ウォーク Leith Walk にあるディクソンズ・アンド・シェイド商会 Messrs. Dicksons and Shade という園芸業者の徒弟に入り、ディクソン家に住み込みながら温室を中心とした園芸技術の習得を続けた。ラウドンは週に2晩は強いグリーンティを飲んで徹

夜をするほどでかれの勤勉さはディクソン一家を驚かすほどであった。ラウドンは休みの時は故郷の父の農場で勤勉に働いた (Simo, 1988: 4)。このころのラウドンは何でも学び調べ尽くそうという知識欲につき動かされていて、かれはエディンバラ大学で学ぶようになった。

当時のエディンバラ大学の知的状況は理想的であった。エディンバラ大学にはラウドンと同じように学ぼうという気持ちの高いスコットランド人同胞の学生が集まっていた。かれらの多くは、農家や職人の子弟たちで身分的にはつましかったが、かれらはみな科学的な知識欲につき動かされてエディンバラに集まってきた。

ラウドンはアンドリュー・コベントリー教授 Professor Andrew Coventry の授業を熱心に行き、しだいに教授からも認められるようになった。コベントリー教授は、農業畜産管理学 husbandry、植樹学 planting、造園学 gardening そして装飾的農業学 ornamental agriculture を担当していた。

なかでも装飾的農業学では、ウィリアム・ギルピン William Gilpin、ユヴェデイル・プライス Uvedale Price、リチャード・ペイン・ナイト Richard Payne Knight、ハンフリー・レプトン Humphry Repton といった当時の高名な風景論者の考えを参照しながら授業が進められた。ウィリアム・ギルピン、ユヴェデイル・プライス、リチャード・ペイン・ナイトは、当時新しく生まれたピクチャレスクという考えの提唱者であった。

ピクチャレスクとは18世紀の英国において生み出された新しい美の規範である。ピクチャレスクの発生は18世紀に貴族の子弟たちがおこなったグランドツアーと呼ばれるイタリア旅行にさかのぼる (本城, 1995; 岡田, 2010; Wilton, 1996)。英国の貴族たちがグランドツアーの目的地ローマで夢中になってみたものは多くの古代遺跡の廃墟であった。かれらは廃墟のある風景に美しさを発見した。英国の貴族たちはグランドツアーでみたイタリアの風景を描いた風景画を買い求め、カントリーハウスの壁面に飾った。英国人の間ではとくにクロード・ロランの描いた風景画に人気が集まった。クロード・ロランは「中景に暗い樹木が茂り、遠景に明るいカンパーニヤの眺望が開けるといった種類の、比較のおだやかな風景」(川崎, 1991) を得意とした。

ピクチャレスクとはクロード・



図1 ピクチャレスク愛好者の芸術家が好んで訪れ、詩や絵画によく描かれた英国西部ワイ川流域にある修道院の廃墟ティンターン・アビー (橘セツ撮影)

ロランの絵画に見られるようなある特定の絵画美を指していた。ユヴェデイル・プライスはピクチャレスクを「荒々しさ、複雑さ、不規則性を特色とする小規模な風景で、鋭い対照と多様な色合いに満ちたもの」と定義する。

18世紀の英国人の廃墟好きは、廃墟を描いた絵画を室内に飾ることにとどまらず、廃墟のような装飾的建造物を新たにカントリーハウスの庭園に建築するまでに及んだ。さらに英国内に多く存在していた廃墟が「発見」され、ピクチャレスクツアーが盛んになった。ピクチャレスク愛好家たちは、英国西部ワイ川流域にある修道院の廃墟ティンターン・アビーを好んで訪れた。ティンターン・アビーはピクチャレスク愛好家たちに多く描かれ詩に詠われた。

カントリーハウスの庭園の風景管理の側面においても、邸宅を広大な地所の中でこれみよがしに誇るようなランスロット・ブラウンの提案するような風景式庭園に対して、邸宅をクロード・ロランの描く風景画にあるような暗い樹木林の中に隠して、遠望できないようにするようなピクチャレスクな風景管理がユヴェデイル・プライスやリチャード・ペイン・ナイトらから提案された。当時のカントリーハウス所有者の知識人の間ではどのような風景管理が品位やモラルの観点からよいのか多様に議論された（ダニエルズ，2001；Seymour et al., 1998）。

ラウドンの師事したコベントリー教授は、いなかの改良においては、たとえ風景の好みが変わるという状況であっても変化しない「耐久性をもった経済的な考え」を持つことが重要であると主張した。それは有用性 *utility* という概念にかさなる。農場経営者にとって「最も有益なもの」が「最もすばらしく装飾的なもの」となることが理想とされた。美しさが有用性をそなえ、有用性が美しさに結びつく。ラウドンはこの哲学を生涯かけて追求した。

2) 園芸デザインを通してのモラルの実践：

i) 温室をめぐる

ラウドンは美と有用性についての理論を実践にうつした。この過程をかれの温室の開発を例にみてみよう。かれは11-12歳の頃マワーに弟子入りしたところから温室の技術開発に携わった。マワーは1794年にボイラーから蒸気を発生させて温室（パイナップル栽培用温室 *pineries*、ピーチ栽培用温室 *peach house*、ブドウ栽培用温室 *vineries*）を暖房するという新しい方法を実験し始めたところであった。

ラウドンはマワーに師事しつつ、コント・ラムフォード Count Rumford やウォルター・ニコル Walter Nicol などの温室技術についての先駆者の著書に学びながら、光、熱、土壌、水、空気といった要素に重点をおいた温室の有用な技術の確立に励んだ。ラウドンは新しい技術である板ガラスや鉄骨などの組み合わせを考案した。ラウドンによって光あふれる温室がはじめて可能となった。

温室技術開発の先駆者であるラウドンは1824年に『温室の手引き *The Green-House Companion*』と題する温室技術の実用書を刊行した。ラウドンは初期の実験段階の温室のデザ

インでは有用性に力を尽くしたが、温室技術に習熟するとしだいに装飾的な方面にも気を配るようになった。ラウドンは20歳の頃から実用性一辺倒の温室に装飾的な要素を付け加えはじめた。図は『温室の手引き *The Green-House Companion*』に示された装飾的な要素を加えた多角形の温室 *Polygonal conservatory* のデザインである。これは庭園の壁に沿った半円形の温室で多角形にデザインされている (Loudon, 1825 (1824初版) : 17-18)。

サイモン・シャーマは『風景と記憶』でラウドンがおこなった温室の技術革新についてこう評している。

ルネサンス期の植物学者たちが一個の庭に全世界を封入しようとした試みと19世紀帝國主義の熱帯造園術のちがいは唯ひとつ、後者における板ガラスが鉄という部材と結び付いた産業革新ということに尽きる。これらがジョン・クローディアス・ラウドン考案のリッジ・アンド・ファロウ工法とうまく合体した時、かつての温室が石組や木枠の窓ということで強いられていた制約が、燦と降り注ぐ光の海の中、あっさりと霧消した (シャーマ, 2005 : 647)。

1831年にラウドンが敷地をデザインしたバーミンガム植物園にはガラスと鉄をエレガントに使用した小温室が建設された (Ballard, 2003)。バーミンガム

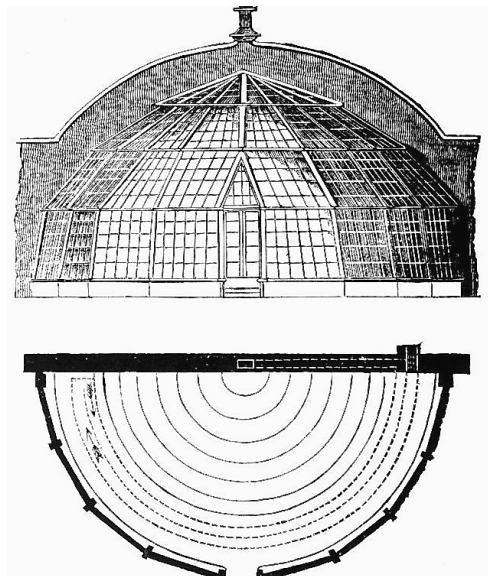


図2 ラウドン『温室の手引き *The Green-House Companion*』(1824) 18頁



図3 ラウドンが1831年にデザインしたバーミンガム植物園では、現在でも、ラウドンを記念してラウドンテラスと名付けられたテラスがある。ラウドンテラスと示された標識の横では、ラウドンの業績についてわかりやすく解説をしている。ラウドンテラスには、エキゾチックな植物を植えた花壇があり、温室を背後にして、眼下には芝生が広がり自然風な植樹をされた風景式庭園を望むことができる。

(橘セツ撮影)

は、ラウドンが1830年に結婚したジェーン・ウェブの出身地でもあった。

ラウドンの死後、19世紀後半には温室のような建造物がますます盛んにつくられた。博覧会場や駅舎など時代の最先端を走る多くのロンドンの巨大公共建築は、ガラスと鉄骨を使用して巨大温室のように建築された。

ii) ラウドンの多岐にわたる活動：園芸雑誌の発刊、樹林園から庭園墓地のデザインまで

ラウドンは1809年にオックスフォードシャーのテウ・パーク Tew Park で効率的なスコットランド式農業をイングランドに根付かせるために農業実務学校を設立し、1811年2月まで運営した。またラウドンは樹木や園芸に関する百科事典など多くの園芸書を執筆し、園芸雑誌『ガーデナーズマガジン *Gardeners Magazine*』を1826年に発刊し、編集した。

1803年以降ロンドンを活躍の場としたラウドンの園芸テーマは多岐にわたったが、かれは生涯を通じて都市の住民が憩う公園などの公共空間のデザインを探究した。ラウドンが20歳のときにはじめて執筆した園芸記事「ロンドンの公共広場をピクチャレスクの利点を利用してレイアウトすることのヒント ‘Hints respecting the manner of laying out the grounds of the Public Squares in London, to the utmost picturesque advantage.’」(『文学雑誌 *Literary Journal*』 2-12 (Dec.31.1803)) はエディンバラ時代からコベントリー教授のもとで培ったピクチャレスク的な風景デザインを都市の中で実践する利点について論じた。

ラウドンは1839年にダービー樹林園 Derby Arboretum をデザインするという仕事を受けた。ダービー樹林園は市民の憩う公園として最初期のものであった。ラウドンはダービー樹林園のレイアウトに芸術と科学の融合を試みた。ダービー樹林園は樹木見本園であるので、それぞれの樹木には樹木名のプレートが示され、樹木の種類に応じてグループに分けて植樹された。ダービー樹林園は市民への教育と公園を散策するというレジャーが同時に可能となる場所となった (Elliott et al., 2007 ; 2011)。

ラウドンはロンドンのような大都市には、計画的に緑地帯 (グリーンベルト) を配置するような都市計画を提案した。さらにロンドンの周りに衛星都市を計画的に配置することを計画提案した。グリーンベルトと衛星都市というラウドンによる提案は、後に、ハワード Ebenezer Howard によってレッチワース Letchworth のガーデン・シティ Garden City によって結実した (Miller, 2010)。

さらにラウドンはロンドンの人口過密が墓地不足の問題を生み出した点に注目した。ロンドンでは従来の英国の村落でのように教区の教会の庭の墓地では足りなくなった。そこで、ラウドンは公園墓地というアイデアを出し、樹木が美しく茂る公園の中に墓地を作り、市民の散策の場所も提供した。

3) ピクチャレスクを超えて：庶民の住宅改良

ラウドンの活動は庭園デザインにとどまらなかった。かれは市民の生活を住環境の改良を通じて改善し、人びとの幸福な生き方を追求するためにはどのようにすればよいのか考えた。ピクチャレスク愛好者の地主は、自らの地所に住む庭師などの労働者の小屋（コテージ）は藁葺きの屋根でツタやイバラが絡まり苔むした様子に趣を見だし、美しいとみなした。たしかにツタやイバラの絡まる苔むした寂しげな家屋は、ピクチャレスク愛好者が好むテーマで、それらは絵画的で神秘的で趣があるかもしれないが、このうらさびれた状態は、荒廃した状態だとみなすこともできる。ジョン・バレル John Barrell は『風景の暗黒面：18世紀前半から19世紀前半の英国絵画に描かれた村落の貧民 *The darkside of the landscape: the rural poor in English painting 1730-1840*』（1980）において英国のピクチャレスクな絵画に描き込まれている貧民の悲惨な生活状況について指摘している。

ラウドンは小屋（コテージ）に住む労働者の悲惨な住環境に目を向け、より快適な生活を提案するデザイン集である『小屋（コテージ）、農場、ヴィラの建築と家具についての百科事典 1・2巻 *An Encyclopedia of Cottage, Farm, and Villa Architecture and Furniture I, II.*』（1832, 1839）を著した。この著作でラウドンはデザイン的にもピクチャレスクで美しく、快適な住環境を目指したコテージのあり方を提言した。コテージのデザインもタイプ別に分け、英国の伝統にそったものから大陸からのデザインも取り入れたスイス風、北欧風などの新しいものも紹介した。さらにラウドンは庶民が健康な生活をおくることができる住宅を追求し、室内に光や新鮮な空気を取り入れるためのある程度大きな窓、暖房設備、トイレなどの衛生的な側面から住環境に配慮した美しいデザインの住まいを提案した。

Ⅲ. 造園作家としてのジェーン・ラウドン：受け継いだ思想と実践

1830年ラウドンが47歳のとき23歳の小説家ジェーン・ウェブ Jane Webb（1807－1858）と結婚した。それ以降ラウドンが1843年に他界するまで、ジョンとジェーンはラウドン夫妻として一体になって助け合って生きた。ジェーンは女性園芸ライターとして園芸の著作を執筆し、ジョンの没後もかれの著作の改訂を続けた。

1) ラウドンに出会うまでのジェーン

ジェーン・ラウドン（1807－1858）の人生は、ビア・ハウ Bea Howe による伝記『みどりの指をもつ女性：ジェーン・ラウドンの生涯 *Lady with Green Fingers: the life of Jane Loudon.*』（1961）に描かれている。この伝記は1961年に、庭園についての雑誌を発行している出版社カントリー・ライフ Country Life 社から刊行された。ジェーンの伝記のタイトルにある「みどりの指 *green fingers*」とは、英国に独特の表現で、生まれながらにして植物を育てる園芸の才能に恵まれたひとのことを指す。しかしながら、もともとはジェーンの家族には、園芸や庭園に

かわるバックグラウンドは全くなかった。

ジェーン・ウェブは、1807年に英国中西部の都市バーミンガムで生まれた。父親はビジネスマンであった。ジェーンの母は、彼女が12歳のときに亡くなった。母が没した後、ジェーンは、父親とともにヨーロッパ大陸で数年をすごし、家庭教師について教育を受け、自宅にある蔵書から学んだ。しかしながらジェーンの父もかのじょが17歳のときに亡くなってしまった。

ひとり残されたジェーンは、文筆で身を立てることを決意した。ジェーンは1824年にはじめての作品 *Prose and Verse* を自費出版する。かのじょの才能を認めた文芸雑誌 *Literary Gazette* の親切的編集者ウィリアム・ジョーダン William Jerdan の援助もあり、ジェーンは「ハンガリーの物語 Hungarian Tales」、「歴史と年代記の対話 Conversations on History and Chronology」などの習作を重ねた (Howe, 1961)。

ジェーンは、1827年に3巻の大作となる小説『ミイラ Mummy』を発表する。これは物語の舞台を未来の22世紀に設定した空想科学小説であった。小説では、独身主義者の女王がおさめる社会で、社会改革主義者、発明家、プランナー、労働者が風刺されている。文明が極度に発達したなか、神秘主義的信仰や偶像崇拜が行われる社会が小説では語られている。この小説では、ジェーンは、煙に全く汚染されない方法を開発したロンドン、テムズ川にそって階段状の公園が設置されている都市の未来像を描いた。当時まだ、実際に未知のものであった機械式の芝刈り機の詳細についてジェーンは描き、空気で膨らませることのできる馬の動力などを小説の中の発明家は産み出した。ジェーンは、これらの知識を、子どもの頃、ビジネスマンの父親や友人のエンジニアたちが、最新の工業技術について話す食卓での会話に耳を傾けることから得たといわれている。

ジョン・クローディアス・ラウドンは、小説『ミイラ』を絶賛した。ラウドンも寄稿していた雑誌の編集者のウィリアム・ジョーダンに頼んで、『ミイラ』の作者とあって、小説の中に描かれていた芝刈り機などの農業機械の構造について詳しく語り合いたいと願った。実際にジョンとジェーンが会ったのは、1830年2月であった。ジョンは『ミイラ』の作者が女性であったことに驚いた。

意気投合したふたりは、その年の9月に結婚した。2年後の1832年10月28日にかれらにとって唯一の子どもである娘アグネス Agnes がうまれた。

ジェーンは、ジョンとアグネスとの生活の中で、植物学、園芸、庭園についての知識をジョンから吸収した。ジェーンは、『女性のための植物学 *Botany for Ladies; or A popular introduction to the Natural System of Plants.*』(1842)の冒頭で、植物学について、子どもの頃一度は、植物の学名の複雑さに覚えるのをあきらめたと述べる。しかしながら、園芸や庭園に関わるためには、植物の名前をおぼえないといけないので、夫のラウドンについてまわって夫に聞きながら学習したと続けて語っている (Jane Loudon, 1842: iii)。

ジェーンは、植物に親しみ、庭園をつくり、世話をすることは、女性にとって、家庭の環境

を整えるという意味でも、レジャーとしても、とても向いていることだとして、Mrs Loudonの作者名で女性の読者を対象に園芸についての啓蒙書を多く刊行し、版を重ねた。

2) ポーチェスター・テラス Porchester Terrace での生活

ジョン・クローディアス・ラウドンはロンドンのバイズウォーター Bayswater のポーチェスター・テラス Porchester Terrace に自身の邸宅を1823年にデザインし居住していた。バイズウォーターは、広大な緑地であるハイドパークの北側にあり、当時はロンドンの郊外という位置づけであった。その地区は、当時、力をつけてきたビジネスや法律などのプロフェッショナルな技能を持った職業人の居住エリアとして人気が出ていた。この住まいのことを、ラウドン自身はヴィラ villa と呼んでいた。ヴィラはもともとイタリア語で、庭園もしくは農地と住居が一体化したいなかの別荘である。イタリアでは上層階級が理想としていたライフスタイルがヴィラで実現していた (Holberton, 1990)。ポーチェスター・テラスの自宅では半エーカーの土地に庭園をつくった。ジョン・ラウドンが著し、ジェーンが改訂した著作『ヴィラの庭師：郊外のヴィラ住宅の選択に向けて *The Villa Gardener: Comprising the Choice of a Suburban Villa Residence.*』(1850) において、ポーチェスター・テラスのかれら自身のヴィラが詳述されている (Loudon, 1850: 134-145)。この建物には、通りに面した正面の中央に半円形に突き出したガラスと鉄骨によるドーム状の屋根を持つ温室 conservatory がデザインされている。外から見ると、1軒の建造物であるが、建物内部では、正面から見て中央で左右に区切られた2世帯の住宅であることが図4から読みとれる。通りから正面に向かって、南側の右半分番地が3ポーチェスター・テラスで、北側の左半分が5ポーチェスター・テラスとなっている。5ポーチェスター・テラスには、ジョン・ラウドンの母親とかれの2人の姉妹ジェーンとメアリーの3人が住んでいた。3ポーチェスター・テラスには、ジョンが住んでおり、1830年9月14日に花嫁ジェーン・ウェブを迎え、ふたりの新婚の住まいとなった。

ラウドンは自宅に、プライベートな空間 (ダ

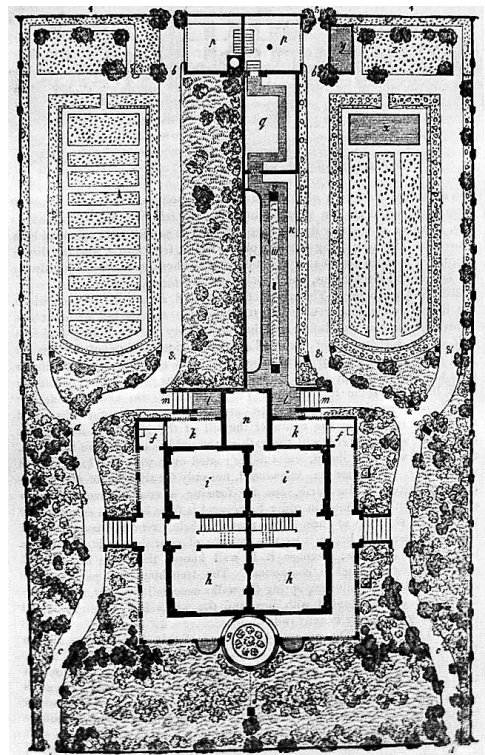


図4 3ポーチェスター・テラス 3Porchester Terrace のラウドン夫妻の自宅と庭のプラン。(出典：Loudon (1850) *The Villa Gardener*: 135頁)

イニングルーム（h）、書斎（i）など）とともに、当時刊行していた園芸雑誌 *Gardener's Magazine* の編集部のオフィスを東側の部屋（n）においた。ラウドンは、先に述べたように温室 conservatory を西側（g）に配置した。この温室は、ラウドンの自宅の際だった特徴となった。ラウドンは、著書『温室の手引き *The Green-House Companion*』（1824）においても建築物に温室 conservatory を付随させるというデザインのアイデアを推進していた。かれは、冬暗く、雨の多い英国の気候のなかで、少しでも多く日光を取り入れ、室内の庭として植物のある空間を取り入れた。

また採光のためにガラスの屋根をつけたベランダが家屋の3面を囲っている。この屋根のある廊下は、ジョン・ラウドンの母親をはじめとする女性たちが、どんな天候でも、歩きまわり、運動を行うことのできるスペースとして活用した。（ラウドンの母は1831年10月に亡くなった。）

半エーカーの庭に、ラウドン夫妻は、多くの木々とともに、

果樹、野菜を植えた。この庭は、ラウドン夫妻と娘アグネスで、計画的に世話をした。

ジェーンは、3 ポーチェスター・テラスに新婚の花嫁として23歳でやってきて以来13年間ジョンとともに3 ポーチェスター・テラスを我が家としてはぐくみ、家事全般をとりしきって暮らした。1843年のジョンの没後も、ジェーンは娘のアグネスとともにさらに15年間、1858年7月



図5 3 ポーチェスター・テラス 3 Porchester Terrace のラウドン夫妻の自宅。建物のみ現存している。半エーカーのかれの庭園は現在は存在しない。（橘セツ撮影）



図6 3 ポーチェスター・テラスの建物の壁にはロンドン市によってブループラグが表示されていて、かつてラウドン夫妻がここに居住したことを記念している。ブループラグには「ここにジョン（1783-1843）とジェーン（1807-1858）ラウドンが住んだ。かれらの園芸にかんする働きのおかげでロンドンの広場にはあらたな美が与えられた。Here lived John 1783-1843 and Jane 1807-1858 Loudon their horticultural work gave new beauty to London Squares」と語られている。（橘セツ撮影）

に51歳で他界するまでボーチェスター・テラスを愛着のある我が家とした。

3) 合理的に楽しんでいなかで生活するために

ジェーンは『レディのためのいなか必携：どのようにいなかの生活を合理的に楽しめばよいのだろうか *The Lady's Country Companion: or how to enjoy a country life rationally.*』(1852)を刊行した。これは、ジェーンの友人のアニーとの書簡の形式のつくりとなっている。アニーは都市で生まれ都市の生活を楽しんできた少女であった。このアニーが結婚して、いなかに住みカントリー・ハウスの女主人として家を管理しなければならない立場となった。都市生活が大好きなアニーはいなかの生活、しかも大きな家を女主人として管理しながら生活することにとまどっていた。アニーは、20部屋以上もあるような大きい家、しかもうす暗く、重苦しく、埃っぽい、寒々しい雰囲気の家をどのように、快適な家とするのかについて苦心していた。このようなアニーの悩みに、ジェーンが、科学的・合理的な方法で具体的に改良 *improvement* の方策をアドヴァイスしたのが本書である。

図7は、アニーが嫁いだ直後のカントリー・ハウスの状態である。ジェーンは、まずアニーに家屋のそばの大きな針葉樹のレバノン杉やスコッチ・パインを直ちに伐るようにとアドヴァイスする。部屋に日光が入らず、寒々とした印象を与えるのは、これらの大きな針葉樹が影をつくり、日光と風の流れを遮っているからだと説く。木を伐れば、暖かい日光も窓から入ってくるし、さわやかな風と明るい眺めを得ることができる。アニーは、



図7 アニーの住むカントリー・ハウスの元の状態、ジェーン・ラウドンの改良する前（出典：Jane Loudon (1852) *The Lady's Country Companion* : 4 頁）



図8 アニーの住むカントリー・ハウス、ジェーン・ラウドンの改良案（出典：Jane Loudon (1852) *The Lady's Country Companion* : i 頁）

このスコッチ・パインは夫が幼少時代からずっとこの家にあり、かれらに馴染んだ風景であるので、木を伐るように夫に頼むことはしのびないと躊躇していた。しかしながら、ジェーンは、主張した。家のそばにある育ちすぎた針葉樹を伐ることによって、得ることのほうが多いと。これらの木を伐ることで、この家に住む皆の健康を得ることができる、さらには、快適な家と幸せを得ることができると説得する。

図8と図9のプランにみるように、家の周りに影をつくる巨大な針葉樹をすべて伐ったのち、ジェーンは家の東側には、窓からも眺められるように花壇を配置した。とくに朝を過ごすモーニング・ルーム（図9の2の部屋）には、明るい日差しがふりそそぐようにしなければならない。ジェーンは、毎朝、窓をかならず開けて空気を入れ替えなければならないと説く。ジェーンは、新鮮な空気の流れは大切であり、毎朝窓を開け、日光とともに新鮮な空気を家に通すことによって人びとは健康な生活を送ることができると科学的に合理的にアニーに説明する。

家の東側には、窓からも眺められるように新しく花壇を配置したが、それらの花壇の花がじゅうぶんに育って見頃を迎えるまで、ジェーンはモーニング・ルームの窓辺に鉢植えの植物をいくつかけようにとアドバイスをした。ゼラニウム2鉢、大きなヒメツリガネ *Sollya heterophylla*、ヒメハギ *Polygala oppositifolia*、フクシア2鉢ほどで充分である。植物を窓辺にたくさん置きすぎて温室のようになるのは避けなければならないと行き過ぎも戒める。バランスが大切だとジェーンは説く。

部屋に置く調度品のアドバイスとして、ジェーンが強調するのは、とくに昼間に使用する部屋の壁に掛けられた装飾品のタペストリーを外すことだ。年代物のタペストリーは部屋の中に重々しい雰囲気をつくり、さらに埃をひきよせる。人びとが埃っぽい部屋で長くすごすと健康を害する。ジェーンはタペストリーの代わりに壁を好みの色に塗るか、もしくは、明るい壁紙を貼るようにとアドバイスをする。

以上のように、アニーへの第1～3書簡をみただけでも、ジェーンが、科学的・合理的な方

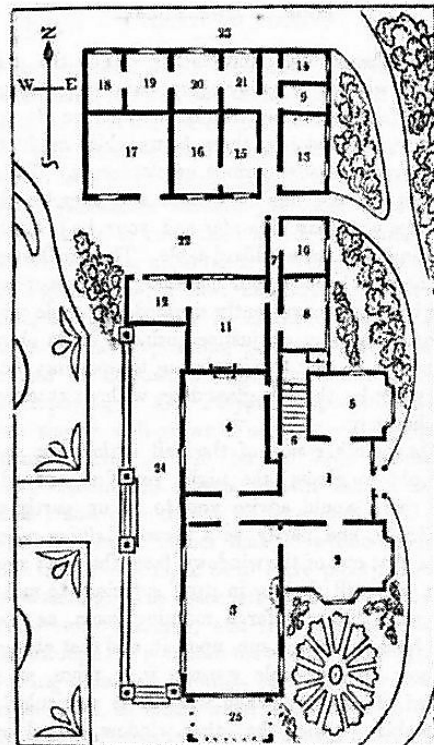


Fig. 1. Ground Plan.—1, Hall. 2, Morning room and library. 3, Drawing room. 4, Dining room. 5, Gentleman's business room. 6, Staircase. 7, Passage to office. 8, Housekeeper's room and store closet. 9, Dressing room for men-servants. 10, Butler's pantry. 11, Kitchen. 12, Scullery. 13, Servants' hall. 14, Room for female servants. 15, Dry larder or pantry. 16, Wet larder and salting room. 17, Laundry. 18, Cheese room. 19, Butter room. 20, Churning room. 21, Dairy. 22, Kitchen court. 23, Road to stable. 24, Terrace. 25, Conservatory.

図9 ジェーン・ラウドンによるアニーのカントリー・ハウスの邸宅の周りの植栽のプラン（出典：Jane Loudon (1852) *The Lady's Country Companion* : 17頁）

法で家に対する悩みについて具体的にアドバイスしていることが理解できる。ジェーンは主婦のためのライフスタイル・アドバイザーの先駆けであった。

Ⅳ. おわりに：「庭らしい庭」ガーデネスクをめぐる

ジョン・クローディアス・ラウドンの名が造園に関して後世まで記憶されるのはガーデネスク *gardenesque* の提唱者としてでもあった。ガーデネスクとは端的にいうと「庭らしい庭」(川崎, 1991: 179) で、ラウドンがはじめて1832年に『ガーデナーズマガジン *Gardeners Magazine*』の8号(Dec.1832)で定義した。ラウドンが定義したガーデネスクは個々の植物がそなえている自然の特徴を存分に発揮できるように植えるデザインのスタイルである。ラウドンは庭園でだけ見られる庭園らしい状態を指し示すものとしてガーデネスクのタームを使った。植物をただ不規則に自然のままに植えるのでは自然と庭園の区別がつかない。ラウドンがガーデネスクで重視したのは、本来の自然の状態ではそこに存在しないような一目で外国産だとわかるようなエキゾチックな植物を庭園に導入することによって人工の手が加わった、いわば自然の芸術を庭園につくりあげることであった。庭園の芸術の程度を高めるためには、外国産の目を引き、目を楽しませることのできる植物を導入することが必要であった。ラウドンは、庭園でしか実現できないような芸術をガーデネスクとして目指した。

ラウドンの没後、幾何学的な整形式な花壇と自然風の風景式庭園の両方を混在させて大小どちらの庭にも合うように盛り込んだ庭園スタイルが「ガーデネスク」としてヴィクトリア時代にもてはやされた。これはエドワード・ケンプ *Edward Kemp* が『小さな庭のつくりかた *How to lay out a Small Garden*』(1850)で提示したケンプによるガーデネスクの解釈であり、本来のラウドンの意図することからはずれていた。ヴィクトリア時代にガーデネスクはラウドン自身の意味するところをはなれて広まっていった。『オックスフォード庭園事典 *Oxford Companion to Gardens*』(1986)にはガーデネスクは「ヴィクトリア時代の発明」とであると書かれている(*Oxford Companion*, 1986: 212)。

ジョン・クローディアス・ラウドンとジェーン・ラウドンはともにどのような園芸の実践によって人間は幸福になれるかという問題を探求した。ラウドン夫妻にとって園芸デザインにかかわる仕事は都市やいなかに住する人びとの幸福な生き方をいかに追求できるかということが重要であると考えられた。かれらの庭園や都市のデザインはモラルの実践の場所であった。

参考文献

- 安西信一 (2000) 『イギリス風景式庭園の美学：〈開かれた庭〉のパラドックス』 東京大学出版会
- 岩切正介 (2004) 『英国の庭園：その歴史と様式を訪ねて』 法政大学出版局
- 岩切正介 (2008) 『ヨーロッパの庭園』 中公新書
- 岡田温司 (2010) 『グランドツアー：18世紀イタリアへの旅』 岩波新書
- 川北稔編 (1998) 『イギリス史』 山川出版社

- 川崎寿彦 (1991) 『楽園のイングランド：パラダイスのパラダイム』 河出書房新社
- 川島昭夫 (1999) 『植物と市民の文化』 山川出版社
- 佐久間康夫・中野葉子・太田雅孝編 (2002) 『概説イギリス文化史』 ミネルヴァ書房
- シャーマ, サイモン (高山宏・梅正行訳) (2005) 『風景と記憶』 河出書房新社
- 白幡洋三郎 (1994) 『プラント・ハンター』 講談社
- 本城靖久 (1994) 『グランド・ツアー：英国貴族の放蕩修学旅行』 中公文庫
- 高山宏 (1995) 『庭の綺想学：近代西欧とピクチャレスク美学』 ありな書房
- 高山宏 (2007) 『近代文化史入門 超英文学講義』 講談社学術文庫
- 橘セツ (2006) 「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」 (p.89-104) 『神戸山手大学紀要』 第8号
- 橘セツ (2008) 「世界漫遊旅行者と庭園：エラ・クリスティの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園」 (p.31-49) 『神戸山手大学紀要』 10号
- 橘セツ (2009) 「庭園のなかの野生と異文化：ウィリアム・ロビンソン『ワイルド・ガーデン』(1870)の思想と実践について」 (p.141-156) 『神戸山手大学紀要』 11号
- 橘セツ (2010) 「英国のカントリーハウス庭園とボライト・ツーリスト：19世紀後半から20世紀のニューステッド・アビーを中心に」 (p.71-89) 『神戸山手大学紀要』 12号
- ダニエルズ, S. (2001) 「ジョージ朝後期イギリスにおける森林の政治的イコノグラフィ」, コスグローブ, D., ダニエルズ, S. 編 (千田稔、内田忠賢監訳, 2001) 『風景の図像学』 地人書房
- トマス, キース (山内昶監訳) (1989) 『人間と自然界：近代イギリスにおける自然観の変遷』 法政大学出版局
- 中島直子 (2005) 『オクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動：その思想と活動』 古今書院
- 村岡健次・川北稔編 (2003) 『改訂版イギリス近代史：宗教改革から現代まで』 ミネルヴァ書房
- メイヒュー, ヘンリー (松村昌家・新野緑訳) (2009) 『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』 ミネルヴァ書房
- メイヒュー, ヘンリー、キャニング, ジョン (植松靖夫訳) (1992) 『ロンドン路地裏の生活誌：ヴィクトリア時代上・下』 原書房
- ローゼン, アンドリュウ (川北稔訳) (2005) 『現代イギリス社会史：1950-2000』 岩波書店
- Ballard, Phillada. (2003) *An Oasis of Delight: the history of the Birmingham Botanical Gardens (Revised Edition)*. Brewin Books.
- Barrell, John (1980) *The darkside of the landscape: the rural poor in English painting 1730-1840*. Cambridge University Press.
- Bean, W.J. (1914) *Trees and shrubs hardy in the British Isles*. Vols. I-III. (1st edition.) John Murray.
- Bermingham, Ann (2005) 'The Simple Life: Cottages and Gainsborough's Cottage Doors' (p.37-62), Bolla, Peter de; Leask, Nigel and Simpson, David (2005) *Land, Nation and Culture, 1740-1840: Thinking the Republic of Taste*. Palgrave Macmillan.
- Boniface, Priscilla eds. (1987) *In search of English Gardens: the travels of John Claudius Loudon and his wife Jane*. Lennard Publishing.
- Coats, Alice M. (1969) *The Quest for Plants*. Studio Vista. London
- Daniels, Stephen with Seymour, Susanne and Watkins, Charles. (1992) 'Landscaping and Estate Management in Later Georgian England' in *Garden History: Issues, Approaches, Methods*, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Elliott, Brent (1986) *Victorian Gardens*. A Batsford Book.
- Elliott, Paul.; Watkins, Charles. and Daniels, Stephen. (2007) "Combining science with recreation and pleasure": cultural geographies of nineteenth-century arboretums.' *Garden History: Journal of the Garden History Society*. 35(2), pp.6-27

- Elliott, Paul; Watkins, Charles and Daniels, Stephen. (2011) *The British Arboretum: Trees, Science and Culture in the nineteenth century*. Pickering & Chatto.
- Hadfield, Miles. (1960) *A History of British Gardening*. John Murray. London.
- Holberton, Paul. (1990) *Palladio's Villas: Life in the Renaissance Countryside*. John Murray. London.
- Howe, Bea (1961) *Lady with Green Fingers: the life of Jane Loudon*. Country Life Limited.
- Jarvis, P.J. (1979) 'Plant introductions to England and their role in horticultural and silvicultural innovation, 1500-1900' in H.S.A. Fox and R.A. Butlin (eds) *Change in the Countryside: Essays on Rural England 1500-1900* Institute of British Geographers Special Publication, 10
- Loudon, J.C. (1824) *The Green-House Companion*. Harding. London.
- Loudon, J.C. (1854) *Arboretum et Fruticetum Britannicum*, Second Edition. Bohn. London. Vol.I.
- Loudon, J.C. (1832, 1839) *An Encyclopedia of Cottage, Farm, and Villa Architecture and Furniture*. Longman. London.
- Loudon, J.C. (1850 : Jane の改訂版) *The Villa Gardener: Comprising the Choice of a Suburban Villa Residence; The Laying Out, Planting, and Culture of the Garden and Grounds*. London.
- Loudon, Jane. (1842) *Botany for Ladies; or A popular introduction to the Natural System of Plants*. London.
- Loudon, Jane. and Robinson, W. (1870) *The Amateur Gardener's Calendar: Being a Monthly Guide As to What Should Be Avoided, As Well As What Should Be Done, in a Garden in Each Month*. London.
- Loudon, Jane. (1852) *The Lady's Country Companion: or how to enjoy a country life rationally*. Longman. London.
- Miller, Mervyn (2010) *English Garden Cities: An Introduction*. English Heritage and Letchworth Garden City Heritage Foundation.
- Page, Judith W. and Smith, Elise L. (2011) *Women, Literature, and the Domesticated Landscape: England's disciples of Flora, 1780-1870*. Cambridge University Press.
- Preston, Rebecca. (1999) "The scenery of the torrid zone": imagined travels and the culture of exotics in nineteenth-century British gardens' in Driver, F. and Gilbert, D. Eds. (1999) *Imperial Cities*. Manchester University Press.
- Price, Uvedale (1794) *Essays on the Picturesque*. London.
- Gardenesque style; John Claudius Loudon の項、Geffrey and Susan Jellicoe et al. (1986) *The Oxford Companion to Gardens*. Oxford University Press.
- Seymour, Susanne; Daniels, Stephen and Watkins, Charles. (1998) 'Estate and empire: Sir George Cornwallis's management of Moccas, Herefordshire and La Taste, Grenada, 1771-1819' *Journal of Historical Geography*, 24(3)
- Simo, Melanie Louise (1988) *Loudon and the landscape: from country seat to metropolis, 1783-1843*. Yale University Press.
- Tachibana, Setsu; Daniels, Stephen, and Watkins, Charles (2004) 'Japanese gardens in Edwardian Britain: landscape and transculturation' *Journal of Historical Geography* 30(2), pp.364-394.
- Tachibana, Setsu (2000) *Travel, plants and cross-cultural landscapes: British representation of Japan, 1860-1914*. PhD thesis submitted to the University of Nottingham.
- Tachibana, Setsu and Watkins, Charles (2010) 'Botanical Transculturation: Japanese and British knowledge and understanding of *Aucuba japonica* and *Larix leptolepis*, 1700-1920' *Environment and History* 16(1). pp.43-71.
- Watkins, Charles and Cowell, Ben. (2012) *Uvedale Price (1747-1829): Decoding the Picturesque*. Boydell Press.
- Wilton, Andrew and Bignamini, Ilaria eds. (1996) *Grand Tour: the lure of Italy in the eighteenth century*. Tate Gallery Publishing.